

## 1. はじめに

人類の誕生は、地質学でいう 400～500 万年程前（第三紀鮮新世の始め）になる。通称「ラミダス猿人」は、歯や頭骨、四肢骨がエチオピアからケニアで発見され、二足歩行と考えられていた。森林の後退や草原が広がるという環境が、二足歩行への重要な進化につながったと考えられている。

140 万年から 170 万年ほど前に、猿人から進化した原人はアフリカから、中近東を經由して西はヨーロッパ、東はアジアへと拡散した。アジアで最も古い原人の化石は、30 万年前のインドネシアのジャワ島で発見されている。沖縄で発見された「港川人」は 18000 年前とされ、アジア南部中国の「柳江人」と似ているが、北部の「山頂洞人(河北省)」とは違っていることから、港川人は中国南部からという可能性を示している。

しかし、日本人の起源についてはそう単純ではない。生化学・人類学・考古学などの学説では、「東南アジア系の縄文人」の居住した日本列島に、「東北アジア系の弥生人」との混血による「二重構造論」が主流になっている。

ドイツの生物学者ヘッケル(E.H.Heackel.1834-1919)が最初に提唱した、個体発生は系統発生を繰り返す、という生物反復説の命題がある。イヌの起源は、古生物学上、約 5,000 万年前の始新世に出現したミアキス上科の動物から進化した哺乳類・ブルパブスと言う肉食性の動物が居て、この動物からイヌ科・ネコ科・イタチ科などが進化したと言われている。このブルパブスからは漸進世(ぜんしんせい)初期の 3,500 万年前になるとヘスペロキオンと言う最古のイヌ科動物が北アメリカに出現した。(図 1)

このヘスペロキオンは、ネコほどの大きさで胴と尾が長く肢(あし)が短く前後の指は 5 本ずつ、歯はイヌと同じ 42 本あり、頭蓋の中はやや広く、吻はそれほど長くなかった。このヘスペロキオンの胴体が長かったと言う事は、弾力的な動きであったことを意味する。イヌの動物分類学上の位置は、哺乳類の食肉目・イヌ亜科・イヌ属にあって、学名を *Canis familiaris* と、スウェーデンの学者リンネにより命名された。犬科動物には、14 属 39 種が含まれる。イヌ属の仲間には、4 グループがあり、オオカミ・コヨーテ・ジャッカル・ディンゴが含まれる。



図 1 ヘスペロキオン「イヌ(教育社)」より

イヌは人に飼われるようになって、大小や性質、その他様々な特徴を持つようになり、非公認記録ではあるが、現在では、500~700種とも言われる程にいろいろな種類が増えた。これは、大昔から人為選抜しながら育てた結果として、犬は簡単に変化しやすく、結果的に多様化したといえる。しかし、犬は大昔から余り変わらない姿や性質も沢山持っている。私たちが日常親しんでいるイヌは人類最古の家畜で、人の住むところに必ずその姿があったと考えられ、その起源や進化についてはまだ研究途上にある。

## 2. 日本犬のルーツ

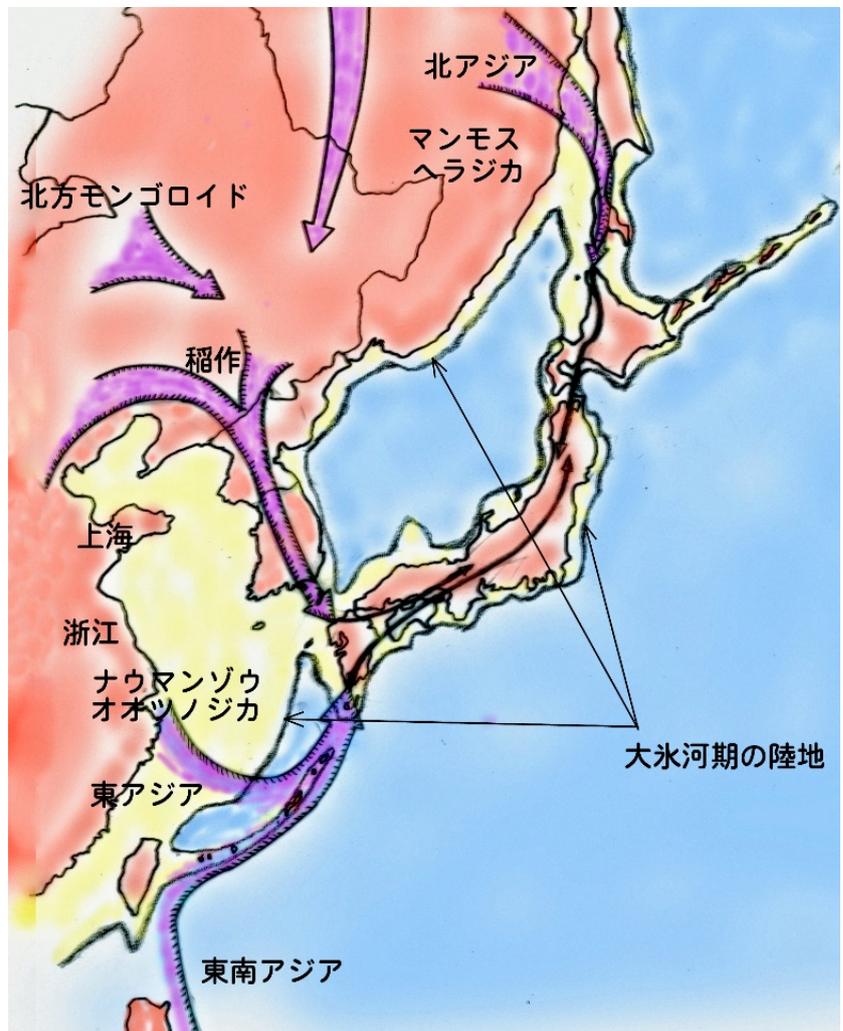
日本列島が生まれる前は、アジア大陸と陸続きで、大氷河時代と呼ばれて、氷河の発達・後退を繰り返していた。北方からはマンモス、ヘラジカ、トナカイ、ヒグマ、ナキウサギ、キタキツネなど、南方からはナウマンゾウ、オオツノシカ、カモシカ、ニホンジカ、ツキノワグマ、ニホンザルなどが移り住んでいた。動物たちと同じく、それらを追って大陸の旧石器時代人も大陸から移り住んできたと推定される。その後、日本列島が大陸より切り離されることにより、それら動物や人類も独自の進化を遂げることになる。後期更新世の最終氷期は20000年~12000年前になり最も寒い時期とされている。海水面は現在よりも100~140mほど下がって、当時の気温は現在よりも年平均7~9度低く、日本列島は大陸の一部となっていた。

### 日本列島の誕生

我が国がユーラシア大陸から離れ、島国となり温暖になった時期、地質年代では更新世が終わり、完新世の始まりの11500年前頃から縄文文化が始まったとされる。考古学上では、土器と弓矢の出現による狩猟があり、ヒトとイヌの協働が考えられる。今のところ、イヌの最も古い発掘例としては9500年前とされている。上黒岩岩陰遺跡から2個体の埋葬骨が出土(江坂ほか,1967)したが、長いこと行方不明とされていた。それが最近、慶應義塾大学で見つかり放射性炭素年代測定による年代が7300~7200前であり、長谷部の区分による小級と中小級と報告された。

図2 氷河期から日本が島国となった頃と、ヒトとイヌが

移動した想定図-五味画



縄文人がイヌの死を悼み埋葬していたことは、決して単純な家畜ではないヒトとの関係を考える、重要な課題でもある。

前述のような日本列島史を考えると、推測では、それよりも古い年代にイヌが居たと考えられる。寒冷期の頃の旧石器時代、近隣からのルートによって、ヒトとイヌが往来していた可能性がある。しかし、1万年より遡ったイヌの歴史については、殆ど判っていない。

### 家畜化のはじまり

現在では、ドイツのオーバーカッセル洞窟で発見された 14,000 年前のものとされる下顎骨が最も古い。(シリアのドゥアラ洞窟から 38000 年前のイヌと思われる遺体の報告もある。その他にも古い年代のイヌらしい遺体の報告があるが、ハッキリしない。)

北イスラエル、ヨルダン溪谷の上流では 12,000 年前に、老女の遺骨と一緒に埋葬されていた仔犬の骨格が発見された。(図 3)

その後同じイスラエルの別なところからも、成熟した 2 頭のイヌが発見されている。最初の、犬の家畜化で有力なのは、「ヨーロッパやアメリカではなく、東アジアではないかと、言われている。

### イヌについての研究

イヌの祖先について、これまでにはローレンツ博士の主張した、イヌの性格や行動がジャッカルに似ているという説が、後に否定された話は有名である。二つ目は、もともと野生犬であったが、今は絶滅したとする説、三番目はオオカミ説である。

最近では、オオカミ説が最も有力だが、二番目の説、つまり野生犬説も浮上している。野生犬の原型とするのは、オーストラリアのディンゴ(図 4)やパリア犬(インドから地中海沿岸にかけて分布)だと考えられている。

日本犬の先駆的探求では、動物学の渡瀬庄三郎、内田亨、犬飼哲夫、鏑木外岐雄、人類学の長谷部言人、考古学の直良信夫、日本犬研究の斉藤弘吉、平岩米吉他、などになる。しかし、何といたってもシーボルトのニホン動物誌に描かれている「狩り犬」と「町犬」を区別し、前者を在来種、後者を混血と推定していた点

図 3 イスラエル、ヨルダン溪谷



は見逃せない。(久我,1985)

図4 ディンゴ

こうした歴史上の背景を踏まえ、縄文（縄紋）時代のイヌは、日本の在来犬として多面的な研究が求められる。私は、縄文時代のイヌとの相似性、原種性がある、という特異な意味に於いて、今後の研鑽と保存が必要であると考えている。

また、この縄文柴犬は、凡そ1万年前の原型に近い形態を残している点が、世界でも類例を見ない貴重な存在である。先学の研究成果によって明らかになりつつあるが、新しい犬種を意味するのではない。

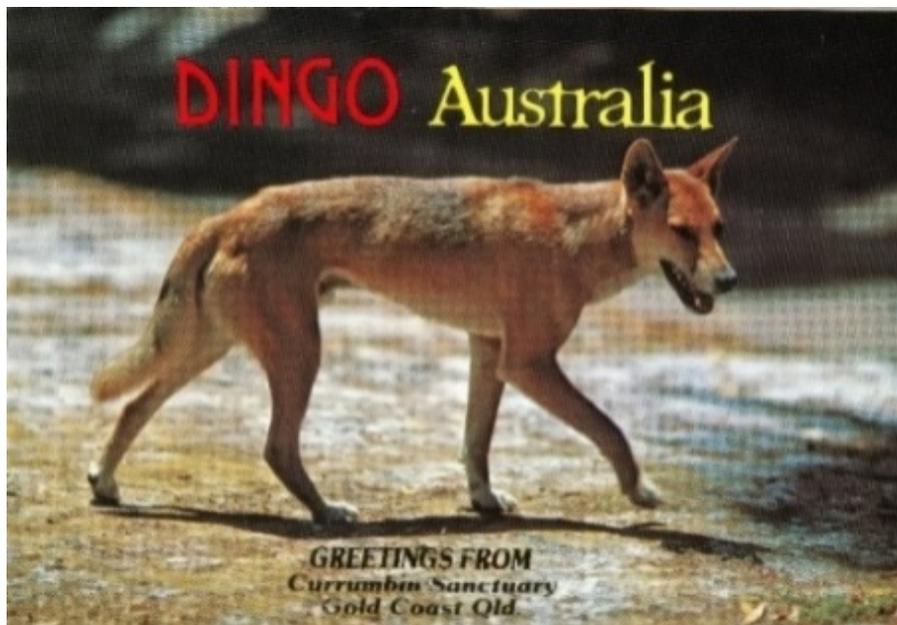


図5 シーボルトの狩りイヌ

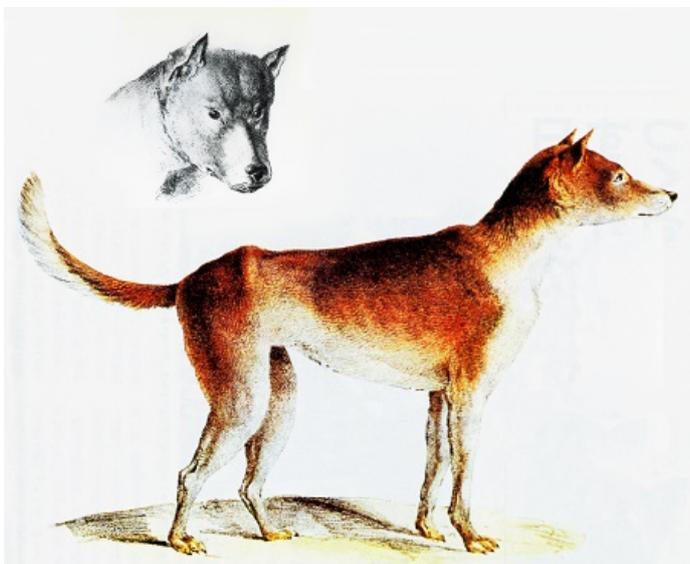
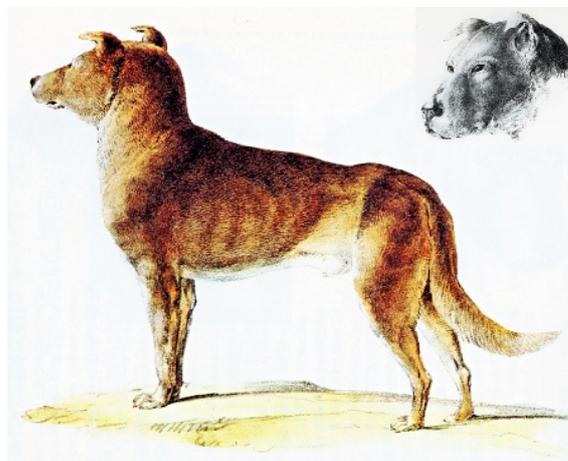


図6 シーボルトの町犬



### 3. 縄文時代のイヌと縄文柴犬

「縄文柴犬」とは、新しい犬種ですか? 「日本犬」とはどんな関係があるのでしょうか? このような質問を受ける事が多くなっている。また、東京・上野にある国立科学博物館の「日本館」に於いては、「縄文人の家族」というコーナーに縄文時代の犬がレプリカで再現されている。この犬のレプリカは、発掘された犬骨データを基に、精密に作成されたと聞かすが、私達が飼育している「縄文柴犬」と体躯構成や顔貌まで、ほぼ同じになっている。(図7. 8)

図7 絵ハガキ部分



#### 縄文時代のイヌ

縄文時代のイヌは額段が浅く小級(長谷部 1952 表 1 参照)から中小級であった。原始的な特徴として、イヌの祖先であるオオカミに近い形態ということが出来る。(茂原 1989)

考古学で獣骨に詳しい金子浩昌 (1984) 先生は、北海道から西日本、南西諸島に至る地域で飼育されていた縄文時代のイヌは、肩の高さ 36~46 cm位、額から鼻面の線が、一般的な柴犬のように凹まず、ゆるやかな傾斜であると分析している

図8 縄文柴犬



表 1 長谷部言人 (1952) によるイヌの型区分 (抜粋、単位はmm)。(動物考古学 2009No.26 より部分)

	小級	中小級	中級	中大級	大級
頭蓋最大長	-155	156-170	171-185	186-200	201-
下顎骨長	-113	114-124	125-135	136-146	147-
上腕骨長	-120	121-135	136-150	151-165	166-
橈骨長	-115	116-130	131-145	146-160	161-
尺骨	-140	141-155	156-170	171-185	186-
大腿骨長	-135	136-150	151-165	166-180	181-
脛骨長	-130	131-145	146-160	161-175	176-

血液蛋白質からみた日本犬の成立について、田名部先生(1989)によると、南方アジアの犬が先に入って来て、古い型の額段の浅い犬ができ、次いで朝鮮半島

から新しい犬が入ってきて、その遺伝子の流入があったと考える、と述べている。

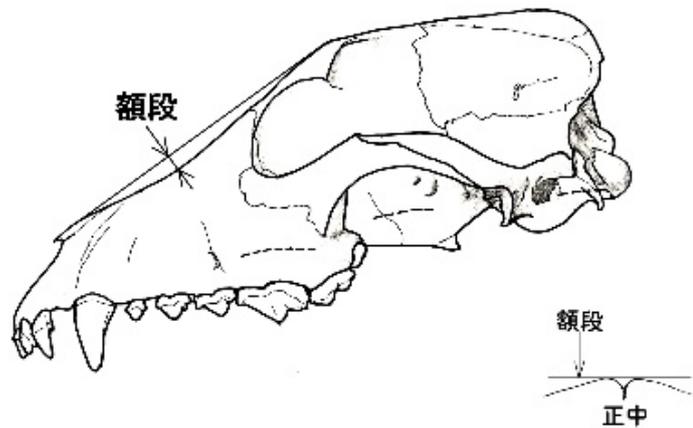
また、DNA 分析に詳しい石黒直隆先生は、古いイヌから検出した mtDNA ハプロタイプは、現生犬に含まれていないが、古代の遺跡から出土したイヌには含まれていた。人為的な操作が加わる前のイヌの方が遺伝的に多様性を示し、日本の古代イヌの祖先は、中国大陸に由来していると述べている。

人類学の分野では、東南アジアに住んでいた古いタイプの集団が、温暖化の日本列島に住み着くが、気候が冷涼化によって北東アジアの集団が渡来してきた、というイヌと似たような二重構造モデルが考えられている。(埴原,1997)

霊長類からヒトの進化を研究している茂原信生先生は、日本犬の起源と形態の研究でも知られているが、縄文時代のイヌの頭蓋最大長はオスが 160 mm 前後(中小級)、メスは 150 mm 前後(小級)であり、この時代のイヌは前頭部から鼻先にかけて直線的で、額段あるいはストップが小さい、と分析している。

ここで言う「額段・ストップ」の定義を明らかにしなければならない。この表現は古くから様々な文献に散見するが、具体的な計測方法と数値を示したのは茂原(1984)先生からになる。(図9参照)

図9 額段(ストップ)



## 縄文柴犬とは

### 額段(ストップ)が浅く小型である

縄文時代のイヌは額段が浅く小級から中小級である。(表1参照)その縄文時代のイヌとは異なるが、頭蓋など良く相似し、品種改良を目的とせず、原種性を保ち続けているわが国の在来犬種を指し、額段の深いタイプの欧米の犬とは異なる。この額段の深さは犬の形態を調べる重要な標識の一つであり、縄文柴犬を除けば、現在の日本犬の多くは深いものが多い。韓国の珍島犬・済州島犬も深いのである。

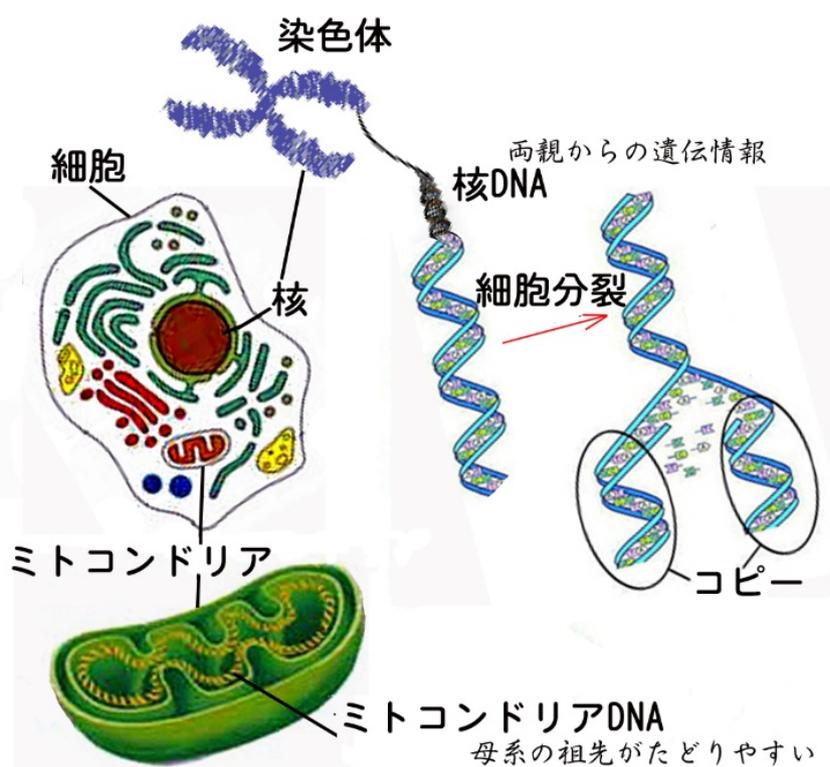
現存する縄文柴犬を見て、「縄文イヌを目の当りに見る思いです。」と、金子先生は風貌の相似性を指摘されるなど、貴重な存在であると考えられる。

縄文柴犬として重要な事は、小型の犬で、額が広く後頭部が発達し、額段(ストップ)が浅く面長で、口吻部は太く頑丈である、という事である。またこうした頭蓋や顔貌については、おおよそ 1920 年以降から、研究報告などで述べられているようである。

## 4. 遺伝子分析の報告

前項までは主としてイヌの形態、特に額段(ストップ)について、おおよそ 2000 年代前頃までの考えを中心に述べた。しかし、生化学における分析手法とその後の進歩によって、これまでの理解では得られない解析が報告されるようになった。この項では、JSRC の方々のために、大まかな生化学での歴史的な進歩について触れてみたが、間違いがあるなら、すべては未熟な私の責任であることを冒頭にお断りする。

第 10 図 DNA 概念図 (フリー画像から編集した)



はじめに、核 DNA( Nuclear DNA、nDNA)は、真核生物の細胞核に含まれる DNA である。この核 DNA は、真核生物のゲノムの大部分をコードし、残りはミトコンドリアや色素体を持つ DNA (オルガネラ DNA) がコードしている。ミトコンドリアの DNA(mtDNA)が母系制であるのに対し、核 DNA は、両親から遺伝情報を受け継ぐメンデルの法則を担っている。DNA とは、核遺伝子とし、真核生物の細胞核に所在する遺伝子の事で、核 DNA は核酸で構成されている。その構造は二重らせんであり、2 本の鎖が互いに巻き

ついている。核 DNA は二倍体で、父親と母親の両方からの DNA を遺伝するが、一方の mtDNA は一倍体で、母親由来の DNA のみが遺伝される。核 DNA の変異率は 0.3%以下であるが、mtDNA の変異率は種間では大きな変異があるが種内変異は小さいとされている。(図 10 参照)

1996 年、田名部雄一先生たちの研究は、日本・東アジアのオオカミとさまざまなイヌの品種 (犬種約 4000 頭) の赤血球蛋白質を支配する DNA の多型座位比較をした。その結果、チュウゴクオオカミにある赤血球ガングリオシドモノオキシゲナーゼ g 遺伝子は、ヨーロッパの品種では見出せないが、アジアの品種では高い頻度で見られた。このことから、東アジアのイヌでは、チュウゴクオオカミが品種の形成に特に重要な役割を果たしていることがわかった。

少し横道にそれるが、1988 年 5 月、明治公園にて現生犬 52 頭(犬の記録含)の取りまとめと採血に、当時の私は柴犬保存会の事務局長として直接関わった。その後、故太田克明先生より、丁寧な手書きで協力に対するお礼文と、1991 年ドイツ・ハンブルグの遺伝学雑誌に発表された論文コピーと、その説明などが

一緒に送られてきた。この段階での論文では「秋田柴犬」(第11図左)と表記されたが、後に「柴犬保存会系」(第12図右)理由もなく偏った表記となった。

1997年、サイエンスに報告した生物学者のスエーデンのチャールズ・ヴィラ博士たちは、67犬種140頭とオオカミは世界の27カ所からの162頭からmtDNAを分析した。それによると、イヌとオオカミは明確に区別出来ない。イヌの祖先は特定のオオカミではなく同じ種に属することを発表した。形態では区別が明らかでも、mtDNA配列上の解析では、イヌとオオカミは区別できない。

2004年、アメリカの遺伝学者・パーカー博士は、96座位についてオオカミと85品種のイヌ、414頭の細胞核のマイクロサテライト多型を比較した。その結果、4つの遺伝的グループに分けると報告した。その中で、オオカミに近く古代に起源をもつ種の順番は、第1のグループ：中国犬(チャイニーズ・シャー・ペイ、チャウチャウ)と日本犬(柴犬、秋田犬)。第2のグループ：コンゴ共和国のバセンジー。第3のグループ：アラスカのシベリアン・ハスキーとアラスカン・マラミュート。第4のグループ：その他のヨーロッパに起源をもつ多くの品種で、比較的新しく分岐したと報告した。この研究は、イヌの家畜化は東アジアのオオカミからなされたとした、とするこれまでの研究を支持する結果となった。

### 古 mtDNA 分析

古代イヌの mtDNA 分析は、遺跡から出土したイヌの骨の固い部分にドリルで穴を開け、採取した骨粉から遺伝子を増幅することで、その時代の系統を解析することが可能となった。mtDNA は、細胞内の小器官ミトコンドリア DNA として、母系でのみ遺伝することで知られる。つまり、母→祖母→曾祖母→玄祖母・・・と、母系を遡ることでその時代の系統が解析可能となった。

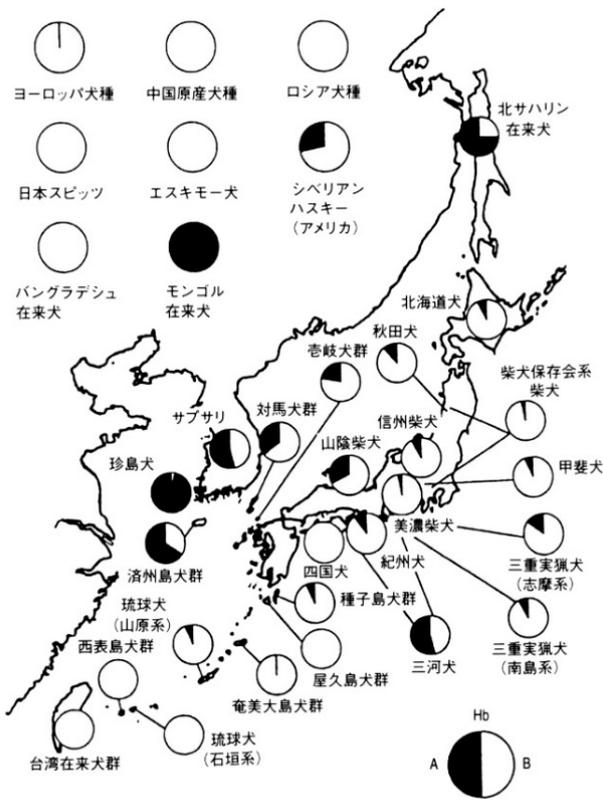
石黒直隆(岐阜大学応用生物科学部教授)先生た

第 1 1 図



Fig. 1. Map showing the locations where blood samples of Japanese, Korean and Taiwan native dogs were collected. The names with asterisk (\*) indicate the dog populations which are indigenous to the areas, but have received no special treatment for the preservation

第 1 2 図



イヌの血球ヘモグロビン遺伝子構成の品種差 (田名部 1996)

ちの研究の報告では、縄文時代・弥生時代・古墳時代・鎌倉時代から、また地理的分布ではサハリンや千島列島を含む北海道オホーツク文化などの検体 145 と、ニホンオオカミと同定されている 7 検体から解析した。それによると、古代イヌに特有のタイプがあり、現生犬に存在するタイプと存在しない検体がある事がわかったが、現在の日本在来犬との関係を直接結びつけることは困難であると報告している。

前項までは、縄文時代のイヌは形態的に一つの集団と思われていたが、遺伝解析での内容には多様性があるという結果が示された。また、ニホンオオカミと在来犬との遺伝的なつながり、直接の祖先ではない事も判明した。(2007・遺伝)以上、短絡的ではあるが、大まかな時代の流れで、イヌの研究分野が大きく変化した一端を述べた。額段が深いか浅いか、体高が大きいかなど、日本の在来種の mtDNA では明確に区別することが出来ないとされているが、今後は、複雑となる核 DNA 研究になる。

話は変わるが、私たち JSRC の前身であるときの 1996 年 10 月 27 日に秋田県で DNA 解析の目的での協力要請があり、約 25 頭の縄文柴犬が採血に参加した。研究参加者は数十名の会員から、地域の町長や医学関係者などが参加して実施された。

研究代表は北海道大学の F 獣医学部教授、研究担当は元法政大学教授・久我先生、採血担当は動物病院院長・獣医師・江差家先生ご夫妻というメンバーであった。ところが何故か F 先生が辞退され、久我先生がその後の処理にあたり「岐阜大に頼んだ」との連絡後、お亡くなりになった。岐阜大に電話を入れたが「そのようなサンプルは知らない・無い」と、即答であった。この問題は、大変に不思議な結果となった。

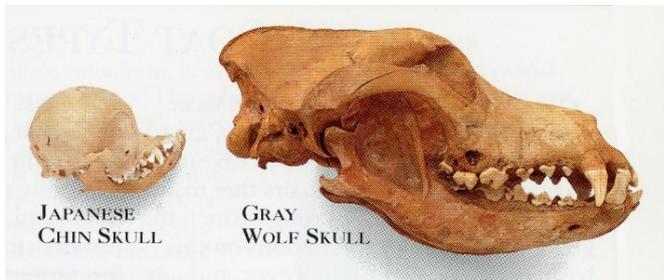
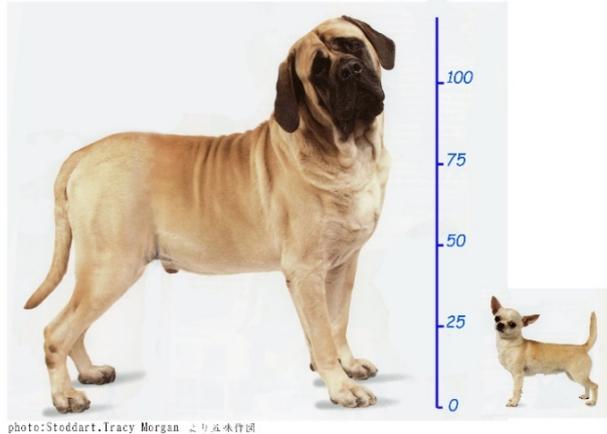
## 5. 犬の特殊性と縄文柴犬

前項でも触れたが非公認記録として、犬種はおよそ 500~700 以上といわれ、国際畜犬連盟(FCI)による体高が世界最小のチワワは 15~23 cm、体重 0.5~3.0 kg。最大とされるマスティフは 70~76 cm を超え、体重 79~86 kg を超える。(図 1 3)同じ種の *Canis lupus* という中に、体高約 4 倍、体重約 60 倍あるという動物は他に存在しない。

僅かな遺伝子の違いが、オオカミであったり様々な犬種である、という見解が前述の遺伝子分析のようである。生物学には、同じ種は交配し子供が誕生するというが、こうした大きさの違いでは事実上交尾は不可能な動物である。

第 1 3 図

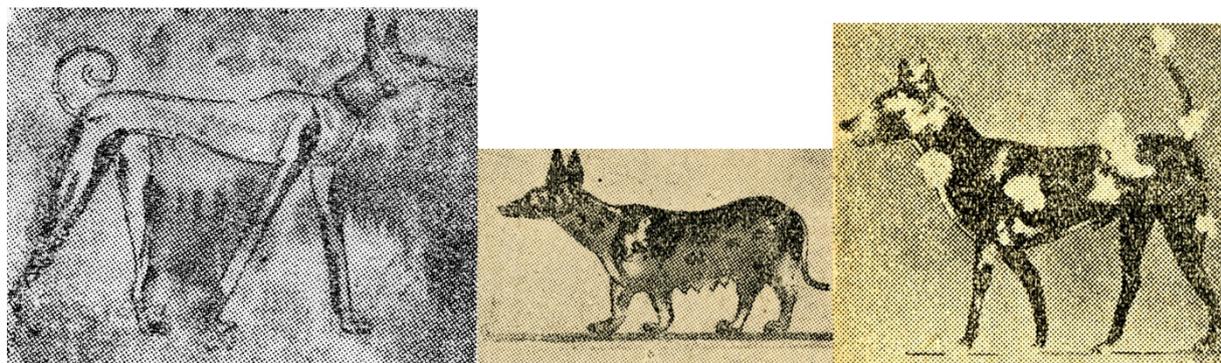
スパニッシュ・マスティフとチワワの比較



第 1 4 図

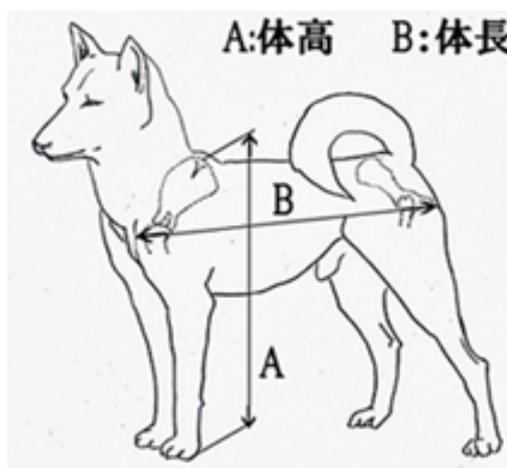
オオカミと犬の頭骨がこれだけ違っても、同じ種になる。

第15図 エジプトの壁画には既にテリア型、狩りイヌ、グレイハウンド型などが描かれている。



イヌの形態を研究している茂原先生や、考古学の金子先生によると、縄文時代に発掘されたイヌは様々な変異もあったと言う。そして「人為的な交配をさせすぎたため、ほかの動物に適応できる生物学の常識が、イヌには通用しないのです。」と。「3~4 世代の意図的な交配で、それまでに無い新しい犬種が誕生する」という見解もあるくらいです。この点は、JSRC として、長年蓄積・追求した研究成果もあり、まとめる段階では無いが、その一端を次項で触れてみたい。

図16 体高測定概念図(肩甲骨上端で測る。)



### (1)縄文柴犬の形態

飼育中の縄文柴犬の体高測定(一歳齢以上)を集約し、その結果を表2にまとめた。参考までに各日本犬の体高と頭骨最大長も、表3にまとめた。(まだ整理中の課題であることをお断りする。)

頭骨では、縄文時代後期の田柄貝塚の出土(1984・茂原、小野寺)と縄文柴犬を比較すると、雄はほぼ横ばいという数値になるが、雌は大型化している。一方、実測体高では、1997年頃と15年後の2015年では雄が0.8cm、雌では0.06cm大型化していることになる。繰り返してはあがるが、測定調査はまだ中間点であるため、後日改めて報告したい。体高測定基準定義に合致した個体選別の作業中である。

図17 左：ニホンオオカミの蹠 右：最近の縄文柴犬の蹠



この中で、雄の頭骨最大長 163.78 mm

は現況・縄文柴犬の体高が 41.3 cmになる。雌の頭骨では 150.3 mmであり体高が 36.4 cmという値になる。まだ整理中だが、体高と頭骨の比較は、年齢などの条件があり、簡単に数値を比較する訳にも行かない。

雄の最大値は 46.5 cm(この 46.5 cmというのは、図 1 肩甲骨上端の測定が確認出来ないが報告のまま扱いました)、最小値は 33 cm、雌の最大値 42.0 cm、最小値 31.0 cmと言う事でした。

(図 1 6 参照)

つまり、顔の表情や性格、犬歯の大きさなど現在の犬とは大きく異なり、音もなく俊敏に走るなどの特徴のほか、イヌの祖先であるオオカミの蹠(小原 1990)である第三指と、第四指の基部が融合している(第 1 7 図)が、縄文柴犬とも相似しており、我が国の急峻な山岳地帯や岩盤地帯に適応したのではないかと(五味 2012)なども考えられる。

## (2)原種的・野性的・適応性

原種的(性)というのは、人工的にあまり改良されなかった(内田, 1948)、と言うような意味であり、やや激しい気性でありながら、鋭い警戒心がある。しかし、一旦信頼を深めた場合(飼い主・人)には大変に素直で従順、忠誠心のような性質(心服)が育まれ、頑固な反面、忍耐強く陽気で純情、様々な環境・条件に適応する能力(研究協議・1987, jomon shiba14 号)がある。そして、体躯構成としては無駄がないのも特徴であろう。

野性的とは、野生動物風と考えても良いが、顔貌などの基本的な事柄は「額が広く平らで、額段が浅く」である。体躯構成は全体的に力強く締まり、無駄がなく弾力性があり、機敏で敏捷にして勇猛な状態を指し野生動物風と考えられる。

即ち、野生動物と対峙する感覚と、いかなる状況にも対応出来る、俊敏な身のこなし方を意味する。この俊敏な動作に関連して、私の調査では縄文柴犬の蹠(あしのうら)の、第 3 指と第 4 指の基部が融合している。(前項・図 1 7)この事象は、単なる早く走るというだけでなく、我が国の急峻な山岳地帯を軽快に音も無く走りまわっていたのであろう、ニホンオオカミとも共通していると考えられる。

土を食べる、野性の植物を食べるなどについては、動物には二次化合物の解毒と関係があり、特にナトリウム不足と関係があるのではないかと考えられている(2003, Cindy Engel)。

身近な植物、ドクダミ(ドクダミ科ドクダミ属の多年草)などは、人の整腸剤とか食材として昔から活

表 2 ↓(注 1 : 1 歳以上。注 2 : 長谷部の 5 段階分類。)

縄文柴犬の体高調査(注1)単位cm						頭骨測定 単位mm		
調査年度	個体数	性	最大値	最小値	平均値	縄文柴犬	田柄貝塚	分類(注2)
1997	49	♂	46.5	33	40.5	163.73	163.78	中小
2015	15		46.5	38	41.3			
1997	61	♀	42	31	36.4	155.7	150.3	中小
2015	26		41	34	36.5			

表 3

1980 在来家畜研究会報告(1 歳以上)

\*1:四国犬は太田測定による

\*2:紀州犬の頭骨は五味所蔵の測定

\*3:2012.3 五味計測

日本犬	性	体高	頭骨全長
		小一大	小一大
秋田犬	♂	64-70	214.9-224.3
	♀	58-64	-
北海道犬	♂	48.5-51.5	151-194.2
	♀	45.348.5	168
紀州犬	♂	50-54	184.5*2
	♀	46-50	-
四国犬*1	♂	49-55	178.8-185.8
	♀	46-52	172-193.1
甲斐犬	♂	40-50	161.5-181.6
	♀	40-50	136.7-172.6
縄文柴犬*3	♂	33-46.5	146.4-181.5
	♀	31-42	144.6-175.4

用されていたが、これはイヌも好んで食べる漢方薬である。イヌが様々な草を食べ（ここではイネ科などを念頭に）、胃の中のを吐き出す事もあるが、ナトリウム不足とも関係があり、下痢の症状も病原体や毒を取り除く作用がある。縄文柴犬を観ていると、体調が優れない様々な理由がある時は自ら絶食し、ひたすら休息をして保温し、自然治癒力に専念する（例:マムシに咬まれても同様の行為が観られる）。彼らが、時に嘔吐をするのも毒や病原体を排出する反応行為（それとは別な理由もあるが、ここでは省略した）であり、これは長い歴史の過程で、野性的・原種的に自然淘汰され、その結果、遺伝的に備わっているのではないだろうか。

### (3) 頭骨はオオカミと似ている

mtDNA の項でも触れたが、在来飼育犬のハプロタイプと比較でも、犬とオオカミを区別するのが難しいと言うが、頭骨も大小の差はあるものの良く似ている。明確な差があると私は思っていたが、考えてみると犬の祖先はオオカミである事と、交配してコドモが産まれるような同じ種であることからすると、これは当然である。ここで、誤解のないように補足するが、縄文柴犬の直接の祖先がニホンオオカミだという意味ではない。

縄文時代のイヌの特徴として、遺跡からの発掘では、次の特徴がある。①全体に頑丈なこと（頭蓋骨、四肢骨）。②前頭部から鼻の先端にかけての窪み（額段、あるいはストップ）が浅いこと。③頬骨弓の幅が小さく、顔の幅が狭いこと。④口吻部が太いこと。⑤歯の異常萌出がほとんど見られないこと、などの形態といえる。この点は、縄文柴犬としての「犬の見方」について、今後の大いなる研究課題でもある。

図 1 8

上：和歌山大にあるニホンオオカミノ頭骨  
下：最近の縄文柴犬(雄)



### (4) 棲み分ける

その地域にとって、縄文柴犬は、必要な環境や条件に通暁し、能力開花が前提になる。条件に通暁した能力開花という意味は、棲み着いた地域において野生動物と縄文柴犬の境界線ができ、結果的に人との協働の環境が存在することである。縄文柴犬は、その条件など(獣害や地形など) 熟知し協働する事になると、これまでの実験や体験上から成果が出ている。この点が、縄文時代から今日までの歴史の流れの中で、日本民族と共に暮らし養われ進化したのであろう、縄文柴犬の平和で従順、愛おしさなどの特色が、一つの棲み分けたそれぞれの地域・環境になると考えられる。

私は縄文柴犬の特性を理解され受け入れられるような、各地域などでの話しあいを様々に企画して、粘り強く長期的な取り組みをすることが求められると思う。短期決戦のような成果があるわけではないので、その理解の到達点は簡単な事では無い。ここには、より多くの自然科学や哲学が必要となる。

そうした成果を生み出す、そのための重要な第一歩は、縄文柴犬の繁殖・育成であり、並行しながら、それぞれの条件に見合った性質などを、認定する取り組みも必要である。性質の認定には、所謂、教条的規格化や観念的優劣とは全く次元の異なる、前述のような縄文柴犬としての、基本的な考え方が重要になるであろう。

この基本的な考え方を認定するには、それなりの知見が必要であり、場合によっては試験・資格制度も検討することが必要である。

こうした展望の実現のために、どうしても必要になるのは、各地で活発な「交流会・勉強会」が開催されることである。(犬の優劣を目的とするような意味ではない。)最初は少人数からはじめ、決して形式にこだわらず、長期の見通しを持って縄文柴犬の特性を観察し楽しく語り合う中で、様々な意見や提案が湧き出てくると期待されると考える。

### (5) 縄文時代の犬とは違う

繰り返しになるが、「縄文時代の犬とは異なるが、それと形態が相似する犬」「およそ 1 万年前の原型に近い形態を残している犬」と定義される。つまり、縄文時代の犬との相似性・原種性と言う観点から『縄文柴犬』と呼び、保存すべき我が国の文化遺産である。と同時に、野性動物など近年のシカにとってニホンオオカミという天敵不在の現象があり、オオカミに匹敵し、飼い主だけに従順でありながら潜在する野生の本能を持ち合わせている動物という観点で、その存在がますますクローズアップされなければいけない。(藤井,2014)そのような意味で、人間社会に貢献できる可能性のある縄文柴犬が、今も、今後も求められ、重要視されることは疑いないと考える。これを、私は縄文柴犬と呼び、保存すべきわが国

の大切な文化遺産だと考えているのである。縄文時代の犬とは違うが、それと相似する犬、という意味で「縄文柴犬」とし長期的な展望で区別、研究する必要性を感じている。

図 1 9

1-縄文時代の頭骨 2-縄文柴犬 3-一般のシバイヌ

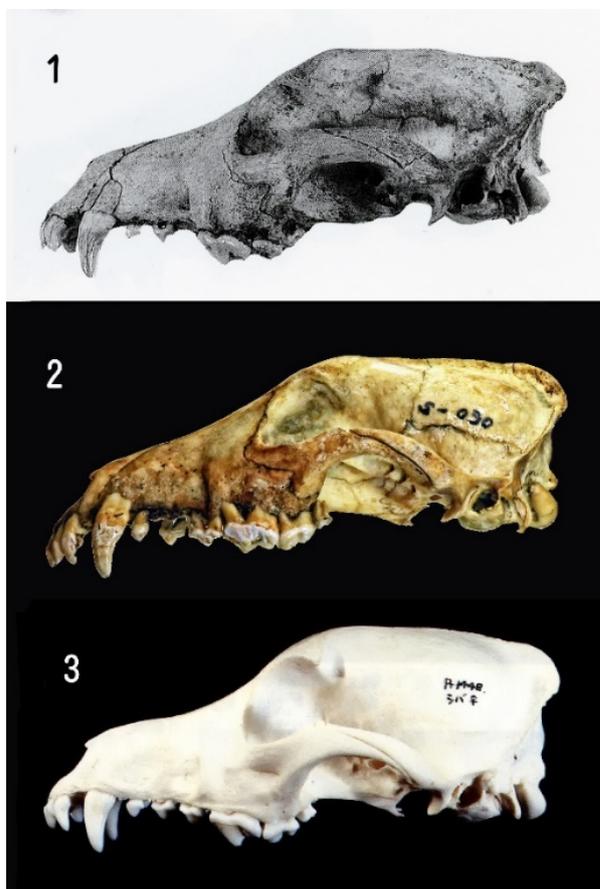


図 2 0 →  
国立科学博物館展示のニホンオオカミの剥製

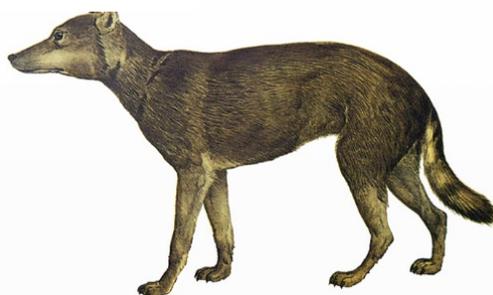


図 2 1 ↑

シーボルトの描いたニホンオオカミ

## 6.保存の理由について

前項までに述べたが、縄文柴犬は小級から中小級型で、額が広く後頭部が発達し、額段が浅く面長で、口吻部は太く頑丈である。「人工的な品種改良が、あまりされなかったわが国の在来種」であり、縄文時代のイヌと形態的な相似性があり、いま生存している唯一の犬である、ということが保存の最大理由である。

繰り返し触れたが、縄文柴犬を見る場合、最初に考えなければならないのは野生動物風な小型のイヌと、原種性という概念である。短絡的に言い換えれば、山野に放たれても、自活できる能力を備え持った犬ともいえる。(内田亨 1897-1981)「原始的で原種的、野生動物(風)」という言葉は、一時期、中城龍雄氏の発言であるかの如き文献もあったが、正しくは前記であり、また、古い雑誌(1933~1943 頃)などにも、日本犬の研究に関わった方々の、野生動物風とか原始的とか原種性などの記述寄稿文は随所にある。

内田亨(1948 年)の文献の中では「北方の犬は動作もゆったりしていて、落ち着いているが、南方の犬は、動作も敏捷で、性質も興奮性である。」など、興味深い指摘もされている。こうした捉え方は、中島基熊(1934 : 日本犬保存会登録犬 1 号の飼育者)の海外見聞(中国・朝鮮・東南アジア)の中にも見受けられる。



図 2 2 ミャンマー中西部ポンダウン丘陵の犬  
(撮影 : 2001.11 茂原)



図 2 3 縄文柴犬

その野生動物風なイヌの原種性とは、一体どんな体型・顔貌なのかという点について、その一部分を述べる。基本的に、いかなる場合においても瞬時に対応できる身のこなし方が備わっていること。つまり、獲物を捕えるとか、身の危険を察知する、等々の場面において俊敏・機敏に反応することが出来るという体型があると、冒頭で述べたが、それは顔貌にも良く表現されるものだと考えられる。

一方で、この野生動物風なイヌの原種性とは、ヒトとどんな関わりがあったのか、またどんな性質だったのか?推測できる要素もあるが、未解決である。しかし、多くのヒントが遺されている。

例えば、内田亨(前出)には「気性が荒い」ので、「野犬(主としてパリア犬)には触れるな」、と言う趣旨の記述がある。また、茂原信生博士からはミャンマーの田舎では、こうもり傘を常に携行し、野犬が寄ってきた場合はパッと傘を開いて追い返すのだ、と伺った事がある。インドから東南アジアにかけての野犬は、概ね、似たようなイメージが報告されている。

野犬的な風貌が（概念を定義するのは難しいが）イヌの原種性の一つの側面であり、基本的に縄文柴犬の体躯構成に無駄がないという特質(後述参照)であり、顔貌であり、雰囲気共通していると考えられる。まだほんの一部だが、イヌの原種性という側面には、多様性が含まれており、アジアの犬(1930年代のパリア犬とかミャンマーの犬)のような少し激しい気性があると考えられる。

こうした原種性という課題については、1987年当時、茨城で有志の研究仲間が集まり、中城氏を囲み数時間の討論があった。その時の記録には、優れた順応性があり、気性の激しい要素は接し方によって、忠誠心のような性質(心服)が強まり、頑固な反面、適応にも発揮される、という認識がある。これを、1990年代以降、私は人と犬との「信頼関係」の確立、と考え表現した。

重複するが、以下に、関連する「審査基準(1990)」の前文を引用する。

『縄文柴犬の歴史は日本文化の歴史に深く関わり、凡そ1万年前の縄文時代には単なる家畜としての役割だけでなく、“家族の一員・仲間”として、共に移動しながら生活をしてきたと推測される。そして、人の葬送と同じように犬を埋葬する、というこの時代の最大の特徴、特別な関係も見られた。

長い歴史の中で、日本民族が共存して来たこの縄文柴犬は、原種的な素朴さと野性的な性質の鋭さを今も失ってはいないと思われる。原種的な素朴さとは、鋭い警戒心がありながらも、信頼を深めた飼い主には大変に素直で忍耐強いなど、従順で陽気で純情である等々の特性を指す。野性的とは、力強く締まった体躯構成で弾力性があり、機敏で敏捷にして勇猛な状態を表す。この縄文柴犬は、額が広く平らで額段が浅く面長であり、鋭く輝い

↓図24

名古屋市教育委員会 BC3900

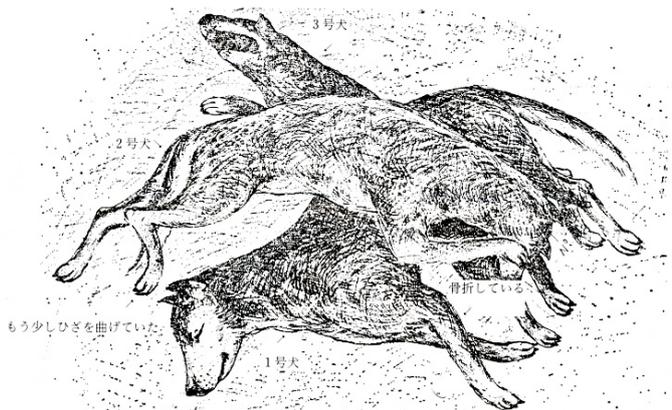


図25↑

船橋市教育委員会(高根木戸遺跡・縄文時代)

た眼、良く締まった口吻はバランス良く、品位ある顔貌が備わっていて野性的な風貌がある。こうした縄文柴犬との共生においては、何よりも信頼と社会性(管理)の統一が求められるが、その事はこうした本質の理解と密接に関連している。』

## 7. 保存活動

### (1) 偏らない見方と研究

これまで述べたように、歴史的経過を見るなら、縄文柴犬は新しい犬種ではないということと、特定の個人や団体の私有物ではないということは明白である。

私が関わりを持った犬の数は良く判らない程多い。その中から、特に、忘れることの出来ない犬を思い出しつつ、「思い出の犬」シリーズを書いてみた。犬の飼育には、単なる犬との暮らしだけに止まらない、多岐にわたる難解で様々な人間関係の物語も存在する。

多くの研究者の報告の中で、考古学の分析を基に、最初に「縄文」という表現を用い、柴犬の名称に活用したのは、1984年頃に中城氏と私が協力して仔犬の飼い主探しの広告を出したことが契機である。それから間もなく、犬の専門雑誌である「愛犬の友」などに「甦ったか縄文犬？」という表現が始まり、「縄文犬」は縄文時代のイヌですから、末尾に「？」を付けた。従って、当時はまだ縄文柴犬という表現はない。インターネットの普及と共に、至る所で「ジョウモン犬」とか「ジョウモンシバ」など「ジョウモンシバイヌ」の呼称が使われるようになり、知名度にはそれなりの効果があった。やがて「縄文柴犬」の名称を利用した、高額な営利目的の仔犬販売や、特定の個人や団体の「犬」だ！とさえ言い出す風潮、一部学問の分野にも見受けられているのは誠に残念である。また「新しい犬種」のような宣伝も見受けられただけではなく、縄文時代の「縄文イヌ」を復元・研究しているかのような、誤った誇大・商業ベース宣伝もある。さらには、縄文柴犬の直接の祖先がニホンオオカミであるかのような考え方や記述もある。JSRCは「縄文犬(イヌ)」の復元などという、誤った考えは持っていない。

一部では、犬は誰の物か？という考えが萌芽し、差別的な排除・排他的な意見を生み出した。しかし、考古学・形態学・生化学・人類学・遺伝学など、前述のように、これまでに解明されただけでもその歴史的背景は一目瞭然である。そして、縄文時代のイヌの研究が深まるほど、わが国の在来種としての文化的遺産

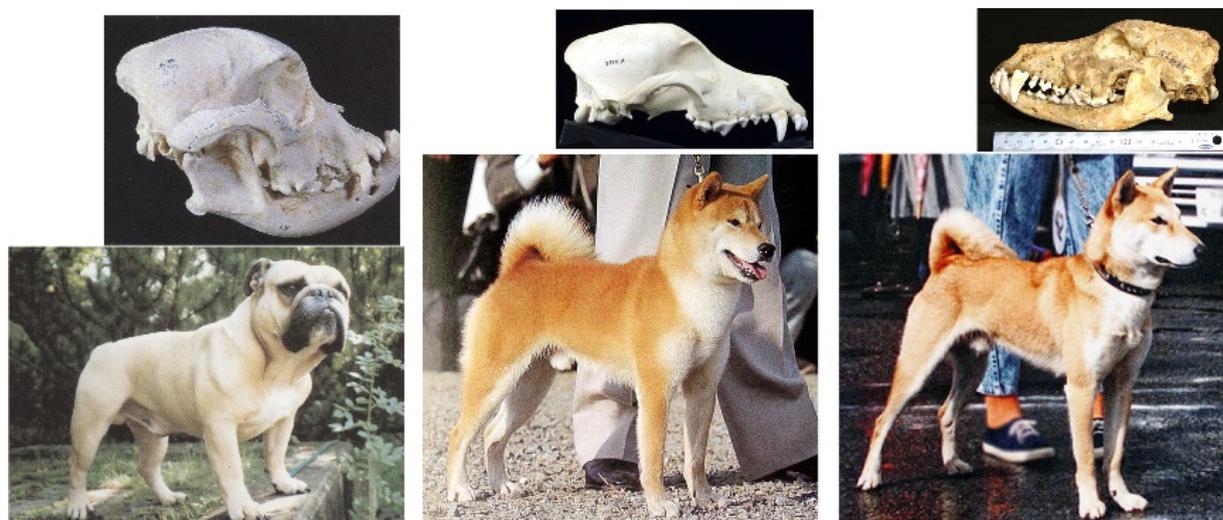


図 2 6 同じ遺伝子という犬の比較 (左から、ブルドッグ・一般的なシバイヌ・縄文柴犬)

であるという背景は明らかであり、保存すべき理由の一端となった。

「良い犬は高価だ」とするような、これまでに述べたように、歴史認識を冒瀆する考え方を持ち込んではないし、そのような偏った固有名詞を研究に用いるべきではない。我が国の在来「種」としての縄文柴犬は、誰か特定のグループや個人の「私的財産」ではない。保存活動にはそうした科学的な思想が特に重要である。本来ならば、国家的事業としての、保存・研究がされる性質の問題だと考え、公平な考え方が重要である。しかし、残念ながらまだまだ全体としては、営利活動が中心であり、一般的には保存という本来の姿の理解には至っていないのは誠に残念である。

当面は、事業活動を展開し、一人でも多くの方々の協力のもとに、「縄文時代のイヌの研究」と「縄文柴犬への理解」と、犬との暮らしを楽しみ探求しながら、「保存活動に参加」していただく事が何よりも急務であり、重要なことである。

## (2) 保存と繁殖・研究は一对である。

縄文柴犬の保存・繁殖について、以下に適切な考え方が述べられている。

1987年当時(前出)の研究メンバーの、尾暮(農林水産省蚕糸試験場)氏は「縄文柴犬の気質や風貌を失っても、可愛くて人懐っこい犬の作出方向が主張されることも起こりうると思います。縄文柴犬の本質的な気質や風貌を失わず、しかも現代社会の中で他の人や犬に友好的な性質を保持することは今後とも重要であると思います。更に、縄文時代には当たり前であった厳しい自然淘汰や人為選抜が現代社会では無いため、虚弱で劣悪な犬であっても飼育され、見た目だけの「優秀さ」が追求される危険性を孕んでいると思います。その他、過度の近親交配による劣悪遺伝子の蓄積を回避するための管理も重要と思います。

これらの問題を解決できるのは、やっぱり“柴犬は特定の個人や団体の私有物ではない”という思想と、犬への愛情でしょう。」と、1987年当時、茨城に集まった研究仲間が、約30年後になってそのお考えを述べておられる。

岩手県立博物館学芸部長・藤井忠志先生は、「縄文柴犬は社会的貢献が出来るか？」の中で、飼い主だけに従順でありながら潜在する野生の本能を持ち合わせている動物という観点で、その存在がますますクローズアップされなければならない。そのような意味で、人間社会に貢献できる可能性のある縄文柴犬が、今、求められ、重要視されることは疑いないと考える。従って、縄文柴犬がその種を維持し続け、これまで以上に謙虚な繁殖活動を行うことが必要不可欠となる。

## (3) 自然交配と研究

犬は簡単に新しい品種を作だし、僅かな期間に500とか700種もの犬種が存在するようになった。このことは少しでも「犬の見方」を変える(誤る)と違った品種に変貌する、ということを経済史の歴史が、如実に物語っているし、私は目の当たりにした。良い犬同士の交配といっても、その根拠となる考え方によって差が生まれる、という僅かな違いを理解する必要がある。主観的美的な姿や形だけを追求して、野生動物に対峙できない犬も見受けられる例もある。

DNA研究は目覚ましい進歩であるが、遺伝分析のイヌに沿っていけば良いのか?という画一的なことではない。ここでは、縄文時代のイヌの形態的・相似的な研究が必要なのはいうまでもないが、同時に我が国の山野を走り回り、野生動物と対峙する能力など、縄文時代の社会性についても学ぶ必要がある。

またもう一方では、近親交配の欠陥を増長させる結果にならないよう、縄文柴犬の特徴や系統を維持するための研究も兼ね揃えることが重要である。そのような意味で、縄文柴犬の研究と、次項で触れる「系統繁殖」の具体的な考え方を今後も研鑽したい。

#### (4) 系統繁殖について

ここでも繰り返しであるが、私の手元にある具体的なデータを述べたい。しかし、1990~2013年頃まで、全体としての分析には至っていない。その一部分 1990~1997年・931頭の系統繁殖の結果によると、縄文柴犬としての不適格な出現は見受けられなかった。以下はその要約である。ここで言う「系統繁殖の定義」は、1~3代までに近親繁殖が含まれないことを前提とする。(後述、JSRCの設立で触れます。) JSRC発行の血統書から、父系№15~22以降、母系 23~30以降のそれぞれに近親交配が含まれていても、系統繁殖と考える。生まれた仔犬は全てが違うと考えるが、その判断する一定の目安と考える。

- ① 2~3例の雌との交配結果、雄の特徴が出現しない場合は、系統繁殖には不適切である。だが、別な繁殖形態を検討の対象とする。(図27・28)ここでの別な繁殖という点は、様々な観点からの多様性を観るという遺伝的な意味から、特別な重要性はあるが、詳述は誌面の都合上別項にゆずる。



図27



図28

- ② 両親犬の特徴よりも明らかな優劣・差異が生じて産まれた場合、外見上はともかく、何らかの遺伝的な無理が生じているという考えを持つことが重要になる。(図28)ここでの問題は、両親犬よりも優れていると判断した場合の対応である。

- ③ 産まれた同胎犬が、外見上判断するのが難しい程良く相似していた場合、ここで言う系統繁殖の確率は、最も理想的であると考え(図29~31)。縄文柴犬の場合は、一度の出産数値が過去の平均値3頭を超えない範囲(母体の条件)が数値的に良い結果を残している。



図29



図30



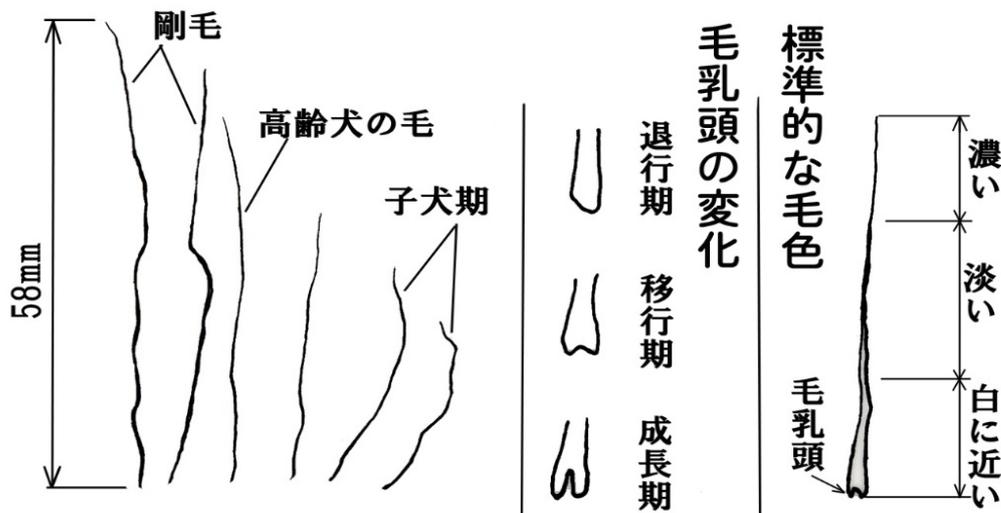
図31

(5)毛色・被毛について（繁殖の注意点）

日本の犬の場合、体全体の「毛色」は、赤毛・ごま毛・白毛・黒毛・虎毛などが挙げられます。ここでは、縄文柴犬について述べますので、虎毛を除外した内容となります。

尾・尻・首の各部の毛はやや長く、背毛はわずかに長く、いずれも開立し皮膚に密着しない状態です。色彩は表面が濃く、下に行くに従って淡くなり根元は殆ど白く見えます。一般的には「根白」とか「二段毛色」とか「三段毛色」と言われています。(図 32 参照)

図 3 2 被毛のこと



また、頸・四肢・胸・腹・尾の「裏側の毛」は、頭・顔・頸・背・尾・四肢の「表側の毛」に比べて色が薄く「裏白」です。この現象は、野性動物とも共通した色調であることを重視し、基本的な色彩として理解する必要があります。

特に、剛毛は太く真っ直ぐで、綿毛（裏毛）は細く柔らかで密生するが、季節や地域、年齢や栄養状態などの環境と条件により、違いが現れ易いことも理解する必要があります。一般的に、夏の毛質は細く短く、冬では太く長い傾向があった。

縄文柴犬の特徴の一つに、微妙で多様な毛色が挙げられます。しかし、例えば「チョコレート色」とか「長毛」のように、外国犬種に共通の色彩、或いは人為的な毛色・毛質などについては、野生動物風の色彩との共通性などを理解して判断する必要がある。

ここで言う「地色」とは、体表の 50%以上の色素を指します。しかし、体表の 50%以上が白毛でも、背の多くの部分が赤毛、黒毛の場合は、その毛色が表現されるという傾向がある。

退化傾向の場合で、曖昧な毛色の場合を注意すると、共通なのは前肢から両肩の表毛の箇所が、脱色しているのが見受けられます。この現象が以下の 33～34 図の例で見る、観察のポイントになる。

野生動物なども、近親交配の影響(道路などで生活圏が寸断された。)と言われる現象として、両肩部分が変色する傾向があるようである。犬は人が管理した結果であり、繁殖の際に、交配相手を選択する上での

知識や考え方が狭いと、こうした傾向が出現すると考えている。ここでお断りしするが、JSRC の系統繁殖の過去では、これまでに退化傾向にある曖昧な状態は見られない。また、巷で良く言う、「良い犬同士(根拠が主観的過ぎる)」という考え方が強くなるほど、その結果として色彩とか毛質の退化など、劣化するような現象が見受けられる点を付記する。。

①繁殖の際は、毛色も考慮しないと退化傾向になる。ここでは、退色パターンの例を概念として 33 図に描いてみましたので参考にしてください。

図 3 3 左：通常の毛色。中：肩から脇腹にかけて退色。右：白地に有色が残った。



図 3 4 左：通常のゴマ毛。中：全体に淡い黒・脇腹から白っぽくなる。右：全体に淡く、地色は白毛で、通常の黒毛(系)が退化し、毛質が柔らかい。



## ② 毛色の呼び方について

i. 赤毛 (注:色彩的表現では褐色とか茶色系・黄土色系に該当するが、ここでは伝統的な表記のままとします。) (a) 濃い赤毛 (b) 薄い赤毛 (c) 明るい赤毛

濃赤毛、淡赤毛とあり、この中で黒毛系が全く混ざらないものから、口吻、耳、背線からその周辺、尾の中央から先端、と広範囲に黒の差毛(刺毛)の混ざったものまでが含まれます。従って、赤毛と言っても決して一様ではなく幅広く出現し、曖昧な場合もあります。

ii. 黒毛(一般的に、頭部から尻尾、腹部の全身が真っ黒というのは出現しません。)

(a) 黒毛(腹部などに白毛が残る。)

(b) 黒褐色 (黒っぽい赤色)

黒毛のなかには、完全に黒一色の場合と、体表の一部分(吻、頬、目周辺、耳、胸、四肢、腹部、肛門周辺、尾)に赤毛(褐色)が入り、斑になる場合もあるが、これらを一様に黒毛としています。しかし、この黒毛の地色

に赤・白が混ざり合う現象もあり、変異は大きい。

注記:斑(マダラ・ハン)については複雑ですが、有色地に大型の斑を指します。

例えば、白色地に有色斑の場合とか、反対に、有色地に白色斑がある場合の全てを指します。有色地に、四肢、腹部、尾などに白毛(斑)は、通常マダラとは言いません。

iii. 白毛(ごく一部分に淡赤が残る。)

(a) 白毛 (b) ぼけ白 (よごれ白) 毛

日本犬でも、特に縄文柴犬の場合は、耳、背線やその周辺(き甲)尾、などの体躯のどこかに僅かな有色(殆どは赤毛)を残しています。従って、純白という事よりは、「汚れ白」とも言える場合が多く曖昧な場合が多くあります。また、加齢の影響により白毛と赤毛の混ざり方が変化することがあります。

iv. ごま毛

(a) ごま毛 (b) 赤ごま毛 (c) 黒ごま毛 (d) 白ごま毛

一般的に胡麻毛とは、赤毛(褐色毛)の間に黒毛が、全身に一樣に混ざり合った状態を指します。地色である赤毛に均等に混ざり合う割合(量)によって、前記 a~d の呼称になります。しかし、交ざり方の現象は、複雑になるに従って呼び名も曖昧となっています。

全体としては、毛質が短く柔らかな場合(34 図右の場合)、日本の在来種とはかけ離れたと考える必要があるかも知れません。

## (6)尾について

### ①尾の位置(尾付)

一般的に尾は、背線より低い位置から出ています。野生動物的な理解では、元々尾は下がっており、日本の犬では背線よりも低い位置から尾が付く、という意味を理解する必要があります。(図 3 5 参照:ここでは、尾が上がった状態で説明します。)

図 3 5 尾付き



尾が付く位置は低く、通常は垂れ下がっているが、太く力強く体型に調和し素直で柔軟であり、癖は感じられない。また、尾は、体躯の端部にあるため、その時々感情とか体調など、様々な影響が現れ易いことをも理解する必要があります。JSRC では、「巻尾」と「差尾」の二つの呼び方によって登録するようにしています。

### ②尾形の表現は(図 36・37 参照)

a) 巻き尾:尾の先端が背線に触れているか、下がっている場合を指し、二重巻きの場合も含まれる。 b) 差し尾:尾の先端が背線より離れている。

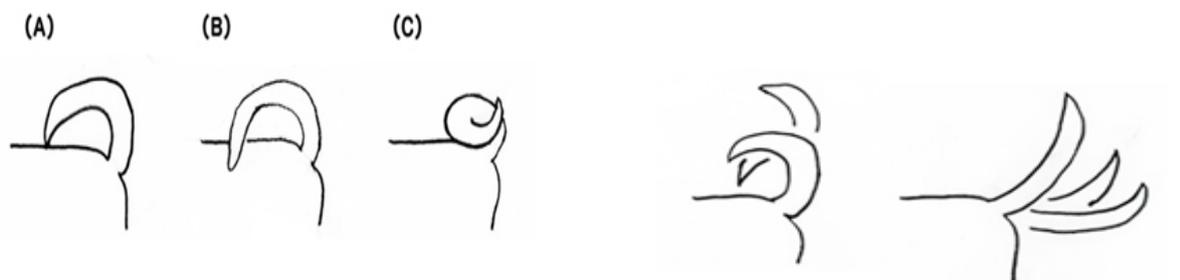
c) 太刀尾・薙刀尾:尾の先端が上に向いている状態などがある。

図 36 と図 37 を比較すると、後者はゆるやかな尾になっています。それに比べて前者は固い巻尾(二重巻き)になっています。尾の形は他にもありますが、ここでは代表的な二つの例について述べます。

良くご存じの通り犬の尾は方向舵として、自在な行動をします。通常のゆっくりした動作の尾の状態で

図 3 7 差尾と太刀尾 (薙太刀尾)

図 3 6 巻き尾：背線に付く



は、それほど差は生じません。しかし、急峻な地形を登ったり下ったり、或いは全速力の走りや進路変更の場合、尾巻がゆるやかな方(第 45 図)が有利であり、尾巻が固い犬との行動差があります。それは日常的に、犬は尾を、方向舵」として使い、走り回るような環境が少なくなったと思われるのが要因でしょうか? 今後の観察が必要である。

因みに、尾は巻いているのが日本の犬、という考え方があります。縄文柴犬の場合は、歴史的に考えて、差尾(図 37)を想定し、通常は垂れた状態(図 38・39)にあると考えている。その根拠としては、野生動物の観察例などから、尾が上がる時は闘争などの場合で、通常は垂れ下がっていると観られる。

図 3 8 ディンゴ

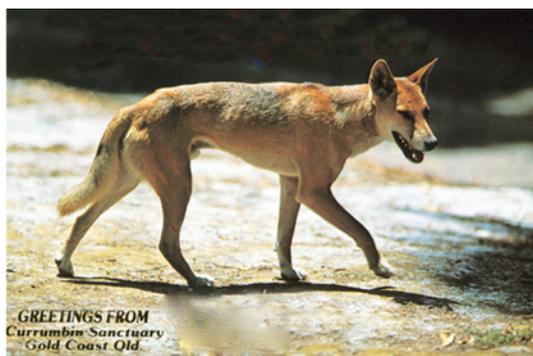


図 3 9 チベットオオカミ (海拔 5 千 m) :

1993.9.22 根深誠撮影



ここでは、俊敏に行動する野生動物たちの尾と共通する点を考えてみたい問題である。また、寒い季節になると、尾で鼻鏡を覆うなどは、野生動物との共通点としても見逃せない。

その他、触れておきたいことは沢山ある。例えば、毛色と鼻鏡色、肛門色、足周りのこと、耳のこと、生殖器などだが、重要なのは、原種性を保ち続けている、縄文柴犬について、その特徴を総合的に理解する事が大切だが、まだまだ現状の知識は浅い。

## (7) 縄文柴犬の飼育条件と肥満

敢えてこの項を設け、「肥満」のことを書かなければならない現況があり、誠に残念である。

肥満遺伝子の存在が解明され、「遺伝子」として認知されたことは周知の通りである。また、肥満遺伝子を持っていない例でも、後天的カロリー過剰摂取によっても太るという。この点は、人に限らず縄文柴犬にも該当する。(以下の出産数という値は、1987年から2005年迄の記録による。)

図 4 0 肥満 (左) と平均な体型(右)



図 4 1 縄文柴犬の大 (♂) 小 (♀)



A:雌が交尾前から、通常の平均的なカロリー摂取状態で受胎した場合、出産数の平均値は3頭である。

B:多産目的かは別にして、交尾前から一受胎の時期に、過剰カロリー摂取状態にすると、出産数が3頭以上産まれる、という例はよくある。産まれた仔犬たちは平均のカロリー摂取状態でも、A群の仔犬と比較すると、B群の方は太りやすい傾向になる。従って、A群の縄文柴犬よりも、B群の方は多めにカロリー消費を必要となる。

総合的に見て、縄文柴犬を健康な世代を持続させるということは、ここでいう肥満制御に関する理解を得ることが将来的にも重要になる。(久保 1989)

縄文柴犬たちの現実を目のあたりにすると、体高とか体重の問題はやはり最低でも「平均値」が重要な目安という捉え方となり、評価(能力・性能)などと深く関わる点は無視できない。(表2・図16:本誌31号、図40・41参照)

## (8) 良い犬(見栄え)ということ-過去を振り返って

私はこれまでを振り返って見ると、「見栄え追求」「良い犬」「優劣」などを、展覧会で比較するという考えには、様々な疑問があったと考えている。最も単純な例は、栄養剤とか様々な化学物質を投与し、成長に良いとか、健康に良い等々がある。短期間で良い成長を期待するが、繁殖など次世代のスパンで見ると、弱点が隠されたような結果があったと言わざるを得ない現象例があり、直接目の当りにしたことがある。見栄えが「良い」という考えで、特定の雄を選抜し沢山の雌との交尾により、多くの劣化現象の出現(例えば、図33・34など参照)にも関わらず、そのような理解が得られていない。前述でも触れたが、「良い犬」という場合は、商品を良く見せて売り込むには便利名営業言葉だが、これでは客観的な科学性を失い、多

様な遺伝さえも失う傾向があると考えられる。

ここでは、「良い犬」という考え方を一端、棚上げにして、同じ父犬から出来るだけ沢山産まれないような繁殖を考えてみたい。保存が目的なら、ここは広義に考え、裾野が広がるような繁殖について研究し、且つ飼育環境や条件についても、併せて検討することが、縄文柴犬の集団としての価値観が生み出せると考えることの方が急務である。

形態的な説明・研究の現況、五味,2012「縄文柴犬ノート」「縄文柴犬の計測について」は、同 2012「イヌの頭蓋撮影の基準について」動物考古学第 29 号、同 2013「犬の頭蓋・四肢骨計測について」同第 30 号に報告した。また、「縄文柴犬の大きさなどについて考える(2015.12)」があるので、併せて参照されたい。

## 8. 縄文柴犬研究センターの設立 (この項では特に個人的な見解になるのでお許し願いたい。)

### (1) 経過と教訓

NPO 縄文柴犬研究センターは 2009 年 4 月、有志によって設立したが、犬の集団として関わりを持った、1980 年ころまで遡り、大きく二つの節目があると考え、その点に触れてみたい。

1—当時の私の恩師である増淵穰からは、人生の哲学を学び、同時に、穰の後輩でもある画家の久米宏一氏などから絵画の楽しさを学んでいた時期です。その恩師の人柄に心服していた延長線上に、その知人、柴犬保存会の主宰中城龍雄氏と出会った。そして、私が 1987 年に、新天地の秋田へ越して、未知での環境において、同氏とは我が家で 2 年間暮らし (介護を含む)、言葉では言い尽くせない苦い経験を持つ。その頃の前後数年間、柴犬保存会での私は、会員名簿の作成、中断していた会報 (「柴犬研究 No.60~72 号」) の発行、血統書発行のための書式化とデジタル化、系統図研究の一覧表・資料などを、当時では珍しかったワープロを駆使して作製し、まとめた。しかし、この集団は、主宰者を筆頭に、流言飛語をはじめ言葉を失い絶句するほど、集団威圧や暴力・封建的・排他的など様々であり、私の心をえぐられ、私の知識にある生き方・考え方とは大きな隔たりを知らされた。右も左も判らない土地で、結果的には、様々な剽窃などを平然と行う、驚くべき集りの渦中から、私は逃げ出した。

2—そのおぞましい経験を踏まえ、改善するために任意団体の「柴犬研究会」を 1990 年に発足、その会誌の発行は、2008 年に 100 号を越えるまでになった。その豊かな内容や理念・研究・業績と民主的な努力・その伝統は、創立から 18 年間続き、会員数も 500 名を数えるまでに発展させた。しかし、それに対する羨望からか 2008 年には、一部の知恵のあるメンバーが 5 年計画で、陰湿な陰謀・威圧的行動で、無防備だった民主的ルールが、クーデターのように根底から破壊された。

前記の集団も同じように、「良い犬は高額だ！」とする考えもこの頃から台頭し、保存と言う美名の理屈で金銭授受に目を眩ませる、という有様となった。こうして私たちが蓄積した著作(文章・デザイン画)成果を剽窃し、仲間とか思いやりとは無縁で傲慢なおぞましい集団に豹変し、文字どおりの魑魅魍魎の世界へのめり込んで行った。

この二つに共通するのは、どこの世界にもありがちな、創意工夫・著作などの成果を、「自分のものに欲しがる」という利己的な剽窃の思想があり、その実行には彼ら特有の天才的とも言える優しい言葉を巧みに操りながらも、背後には「流言飛語」を用いるという二面性の性癖が根強い点である。こうした現象を繰り返さないために、私たちは良く話し合い、柴犬研究会の優れた理念を引き継ぎ、法に基づいた研究団体の設立を決意した。

## (2)JSRC の理念

JSRC として、縄文柴犬の保存にとって大事なことは、理念・理論・研究が求められるのは当然だが、その背景には繁殖についての考え方が特に求められる。それらの結果として、様々な基本的なデータを得ることが重要であり、広範な協力者が必要になる。ここの考え方に、開かれた組織という課題が存在し、科学的な活動が求められる訳である。

その理由に挙げられるのが、前項でも触れたが、これまでの経過には、ある犬の特徴だけを強調し、ごく限られた雄(または雌)によって繁殖することが優位とされ、高額な仔犬売買の特権を得るという課程がある。この点は、我が国の殆どの犬種団体に見受けられるということである。これを例にして考えると、大きな集団としての縄文柴犬は、目先の小さな家族の中で近親繁殖が行われ、これを一定のスパンで見ると、結果的には大事な特徴が失われる、という条件や背景になる。生物学・生化学・形態学・人類学・自然科学・考古学などを学びながらも、より多様性のある縄文柴犬の能力開花について更に研究が必要であるという理由はここにある。そうした科学的なデータを集約し分析し、それをまとめ発展させ、指導出来る能力の組織体を目指す最大の理由がここにある。

その中の理念(信条3箇条ともいう)は

1. 日本民族の文化遺産、「縄文」柴犬を保存する。
2. 科学的成果に学び、経験を生かして「縄文」柴犬の正しい見方、研究を深める。
3. 動物愛護の精神に則り、平和で優しい仲間として、相互に協力する。

この信条3箇条は、柴犬保存会で得たおぞましい教訓から、柴犬研究会の設立時(1990)に、私の経験に基づいてまとめ 1990.8 柴犬研究創刊号に掲載した考えである。JSRC 定款では〔目的〕に、この法人は、「縄文」柴犬を愛する人が協力して、縄文柴犬の研究・保存・普及に関する事業を行い、動物愛護の精神に則り心豊かな人と犬との共存社会を育むことに寄与することを目的とする、と掲げている。

また〔特定非営利活動の種類〕この法人は前条の目的を達するため次に掲げる種類の特定非営利活動を行う。

(1)環境の保全を図る活動

(2)科学技術の振興を図る活動

(3)社会教育の推進を図る活動

(4)前各号に掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言、又は援助の活動

以上を掲げて、不純な動機とか、自利的な利益追求というような考えを持ち込まないで、必要・具体的な事業活動を行うことにした。

これらのルールは明確であるが、まだ不十分である。しかし、ルールに従って、正しく運営を行い、伝統を守る事が出来れば、文化的な伝承の蓄積も出来る、と確信するに至った。幸いにして、多くの関係者からご信頼・ご協力を賜ることが出来つつあるのではないかと考えている。

## まとめ

日本列島が誕生し島国になった頃から、この縄文柴犬の、およそ一万年の物語が今のところは続くことになる。ここまでを振り返って、犬の研究は単なるイヌを学ぶ話ではなく、人類がどう関わり生きてきたのかを学ばないと、本質的なイヌ学は見えない。我が国の、イヌ学は類例がないと思われるほど、豊かな内容と深く楽しい過去が存在している事を、学ぶ必要がある。私たちはこの豊かな内容を知った以上、「研

究・伝承」に相応しい活動を展望すべきである。しかし、この豊かな内容は、現状では理解があまり認められていない実態も事実である。

環境破壊や、生態系の乱れ、福島原発問題、自然界にはこれまで存在しなかった化学物質が増え、環境ホルモンが問題になる今の時代に、緊急課題があまりにも多すぎる。しかし、それらに怯むことなく大いに挑戦する価値がある。

我々はいま、この縄文柴犬を単なる犬自慢で終わらせることは望んでいない。これまでに経験したことのない、世界にも類例が見当たらない計画への挑戦である。そのために、縄文柴犬の保存活動と、社会的活用を目指す上で、様々な方向性に見通しが持てるまでの理論と実験の展望が開けようとしている。同時により高い展望を構築しつつ、新しいテーマを生み出す必要性も求められ、更に輝くような展望もあると考えられる。

最後になりましたが、茂原信生先生から、私の未熟な知識に対して貴重なアドバイスをいただきましたこと感謝申し上げます。また、金子浩昌先生・藤井忠志先生から励ましのお言葉を頂きありがとうございました。私もアツという間に高齢者となり、物忘れと資料の探し物ばかりに時間を費やされ、不十分で欠陥だらけの拙文に付き合わせましたこと、関係者の皆様にお詫びいたします。ありがとうございました。

(2016.3.25・2017.4.10 修正)

#### 参考文献

斎藤弘吉,1964.日本の犬と狼.雪華社,東京.

直良信夫,1965.日本産狼の研究.校倉書房,東京.

日本犬保存会創立 50 年史,1978.社団法人日本犬保存会,東京.

在来家畜報告,1980.在来家畜研究会,名古屋.

井尻正二,1981.井尻正二選集 1・2・4・5. (株) 大月書店,東京.

今泉吉典ほか,1983.このふしぎな動物・イヌ,教育社,東京.

内田亨,1948.犬-その歴史と心理.創元社,東京.

内田亨,1982.家犬と野生犬,動物と自然-1. ニュー・サイエンス社,501.東京.

金子浩昌,1984.考古学シリーズ-貝塚の獣骨の知識-人と動物のかかわり.東京美術,東京.

金子浩昌,1987.縄文人にいつくしまれたイヌ.アニマ 28-33,東京.

金子宏昌,1982.古代北方の海洋文化と犬.動物と自然-1, ニュー・サイエンス社,501.東京.

金子浩昌.1989.縄文時代のイヌ.考古学ジャーナル,ニュー・サイエンス社,303.6-14,東京.

江坂輝彌.1989.中型日本犬(柴犬)の起源を探る.考古学ジャーナル,ニュー・サイエンス社.303.2-5,東京.

江坂輝彌,1994.縄文人が飼育した日本犬の先祖について.考古学ジャーナル,ニュー・サイエンス社,370.1,東京.

平岩米吉,1981.7.狼-その生態と歴史.動物文学会(池田書店),東京.

平岩米吉,1982.犬の祖先は狼である.動物と自然-1. ニュー・サイエンス社,501.東京.

丹羽百合子,1982.縄文時代人と犬.動物と自然-1,ニュー・サイエンス社,501.東京.

久我光雲,1985.fh.Fr.von Siebl 研究論集.法政大学フォン・シーベルト研究会編,東京.

田名部雄一,1989.血液蛋白からみた日本犬の成立.考古学ジャーナル,ニュー・サイエンス社,303.15-21,東京.

田名部雄一,1989.南で生まれた北海道犬.科学朝日,9,20-25,東京.

田名部雄一ほか.1991.生化学的遺伝子からみたアジアとヨーロッパの家犬と日本の在来犬の関係.動物育

種・遺伝学雑誌.108.455-478,ハンブルグ・ベルリン・ドイツ.

田名部雄一,2007.イヌの起源と日本犬の成立,生物の科学-遺伝.61,4,55-61,(株)エヌ・ティ・エス,東京.

茂原信生,1986.東京大学総合研究資料館所蔵長谷部言人博士収集-犬科動物資料カタログ.東京大学総合研究資料館標本資料報告,№.13,1-187,東京.

茂原信生,小野寺覚,1986.田柄貝塚出土犬骨の形態的特徴について,「田柄貝塚」,宮城県文化庁,宮城県文化財帖佐報告書 111 集,589-672,宮城県.

茂原信生,1987.ヒトの咀嚼器官の未来を示すもの.歯界展望 70-4.5.6,東京.

茂原信生,1989.古代日本犬の形態変化.考古学ジャーナル.ニュー・サイエンス社,303.22-27,東京.

茂原信生,1991.日本犬に見られる時代的形態変化.国立歴史民俗博物館研究報告,29,89-101,千葉.

茂原信生,2003.縄文人はどのようにイヌと付き合ったか.考古学ジャーナル.ニュー・サイエンス社,501.6-10,東京.

茂原信生,2007.古代犬の形態と現在の日本犬.生物の科学-遺伝, 61,4,62-65, (株)エヌ・ティ・エス,東京.

茂原信生,2007.形から探る-イヌ.生物科学,58,3-130-139,日本生物科学協会,東京.

茂原信生,2009.石器時代日本犬・長谷部言人.動物考古学,26,81-170,千葉.

茂原信生,石黒直隆,江木直子,2011.イヌとネコはどこから来たのか?.Newtonpress 第2集 P52-61.東京.

小宮孟,2003.縄文犬の研究動向.考古学ジャーナル.ニュー・サイエンス社,501.4-5,東京.

石黒直隆,2003.古 DNA 分析で探る縄文犬の系統.考古学ジャーナル.ニュー・サイエンス社,501.11-15,東京.

石黒直隆,2007.イヌの分子系統進化.生物科学,58,3-140-147,日本生物科学協会,東京.

石黒直隆,2007.古 DNA 分析からみた日本在来犬の系統とニホンオオカミとの関係.生物の科学-遺伝, 61,4,70-76,(株)エヌ・ティ・エス,東京.

石黒直隆,2011.絶滅した日本のオオカミの遺伝的系統.日本獣医師会誌.65,225-231

村山美穂,2007.オオカミからイヌへ-行動に関与する遺伝子の変化,生物の科学-遺伝, 61,4,66-69, (株)エヌ・ティ・エス,東京.

菅原弘樹,2003.埋葬された縄文犬と散乱した犬骨,考古学ジャーナル.ニュー・サイエンス社,501.16-19,東京.

加藤久雄,2003.歯冠計測値からみた縄文時代のイヌについて.考古学ジャーナル,ニュー・サイエンス社,501.20-23,東京.

埴原和郎,1996.日本人の成り立ち.人文書院,東京.

埴原和郎,1996.日本人の誕生-人類はるかなる旅.吉川弘文館,東京.

埴原和郎,1997.日本人の骨とルーツ.角川書店,東京.

埴原和郎,2000.人類の進化-試練と淘汰の道のり.講談社,東京.

加藤普平,1988.日本人はどこから来たか-東アジアの旧石器文化-岩波新書,東京.

鈴木尚,1998.骨が語る日本史,学生社,東京.

勅使河原彰,1998.縄文文化,新日本出版社,東京.

勅使河原彰,安蒜政雄,2011.日本列島石器時代史への挑戦.新日本出版社,東京.

山口敏ほか,1997.日本人の起源の謎.(株)日本文芸社,東京.

中城龍雄,1983.日本の犬-歴史と現状と将来,(株)NGS,大阪.

E.ツイーン,白石哲訳,1977.オオカミとイヌ.思索社,東京.

J.C.マコーリン,澤崎坦訳,1984.イヌ-どのようにして人間の友になったか.岩波書店,東京.

バリー・ホルスタ・ロペス,中村妙子,岩原明子訳,1984.オオカミと人間.草思社,東京.

ファーレイ・モウワット,小原秀雄,根津真幸,1984.オオカミよなげくな.5刷,紀伊國屋,東京.

K・ローレンツ,小原秀雄訳,1987.人 イヌにあう.16刷,至誠堂,東京.

ジェームス・サーベル,森裕司監,武部正美訳,1999.犬-その進化-行動-人との関係.チクサン出版,東京.

フィオレンツォ・ファッキニ著,片山一道訳,1993.人類の起源,(株)同朋舎出版,東京.

シゲイ・エンジェル,羽田節子訳,2003.動物たちの自然健康法.3刷,紀伊國屋,東京.

小原秀雄,1986.人(ヒト)に成る.3刷,大月書店,東京.

小原秀雄,2000.現代ホモ・サピエンスの変貌.朝日新聞社,東京.

佐々木義之,1994.動物の遺伝と育種.朝倉書店,東京.

篠田謙一,2008.日本人になった祖先たち.日本放送協会,東京.

西本豊弘,2008.人と動物の日本史-1.(株)吉川弘文館,東京.

上田正昭,2013.私の日本古代史,3刷.(株)新潮社,東京.

猪熊壽,2004.イヌの動物学,2刷.東京大学,東京.

内山幸子,2014.イヌの考古学.(株)同成社,東京.

小原巖,1990.神奈川県愛甲郡清川村に保存されているニホンオオカミの前肢.神奈川自然誌資料,11,67-69  
神奈川県立博物館,神奈川.

中村一恵編,1998.オオカミとその仲間たち-イヌ科動物の世界.神奈川県立生命の星・地球博物館,神奈川.

中村一恵,2004-2006.ハウリング①-⑩,柴犬,No.83-93,秋田.

犬の研究,1933(創刊号)~1943(終刊記念号・欠番あり).犬の研究社,東京.

Jomon-shiba 2009-2016,No1~29.NPO 縄文柴犬研究センター,秋田.

五味靖嘉,2012.縄文柴犬ノート.精巧堂出版,秋田.

五味靖嘉,2012.イヌの頭蓋撮影の基準について.動物考古学 29,動物考古学研究会,千葉.

五味靖嘉,2013.犬の頭蓋・四肢骨計測について.動物考古学 30,動物考古学研究会,千葉.